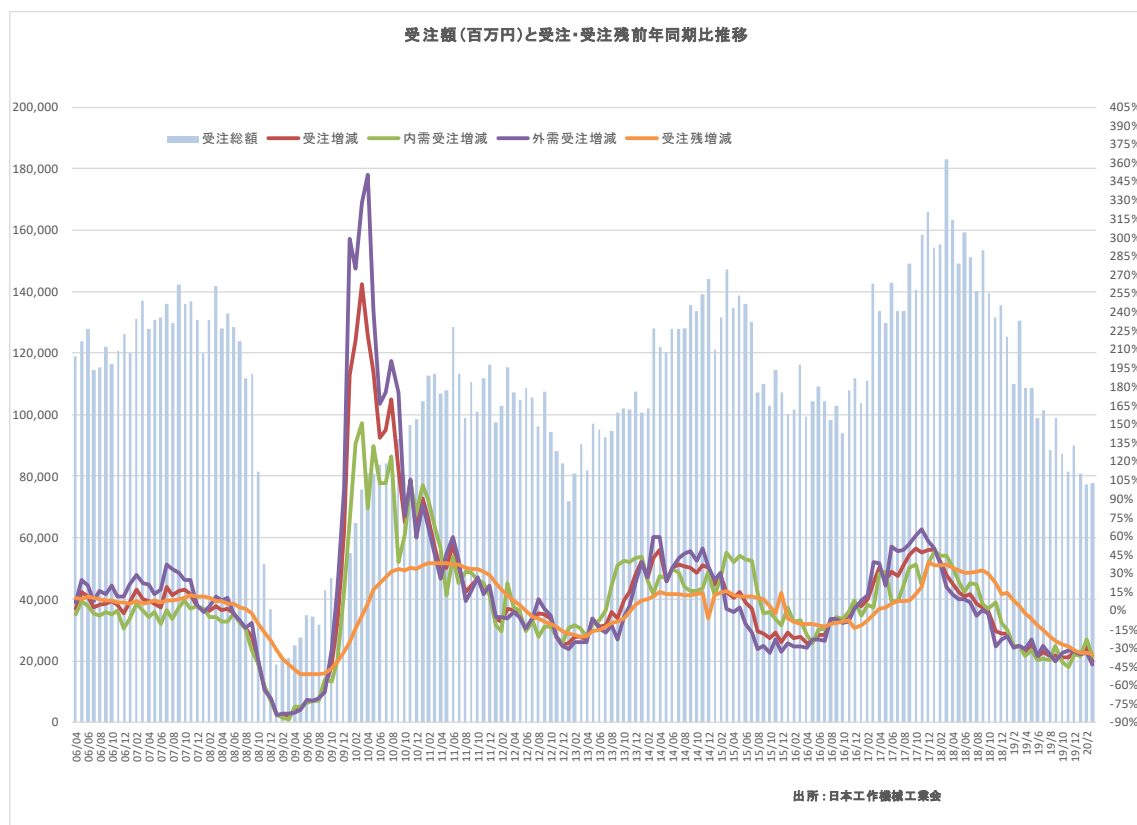


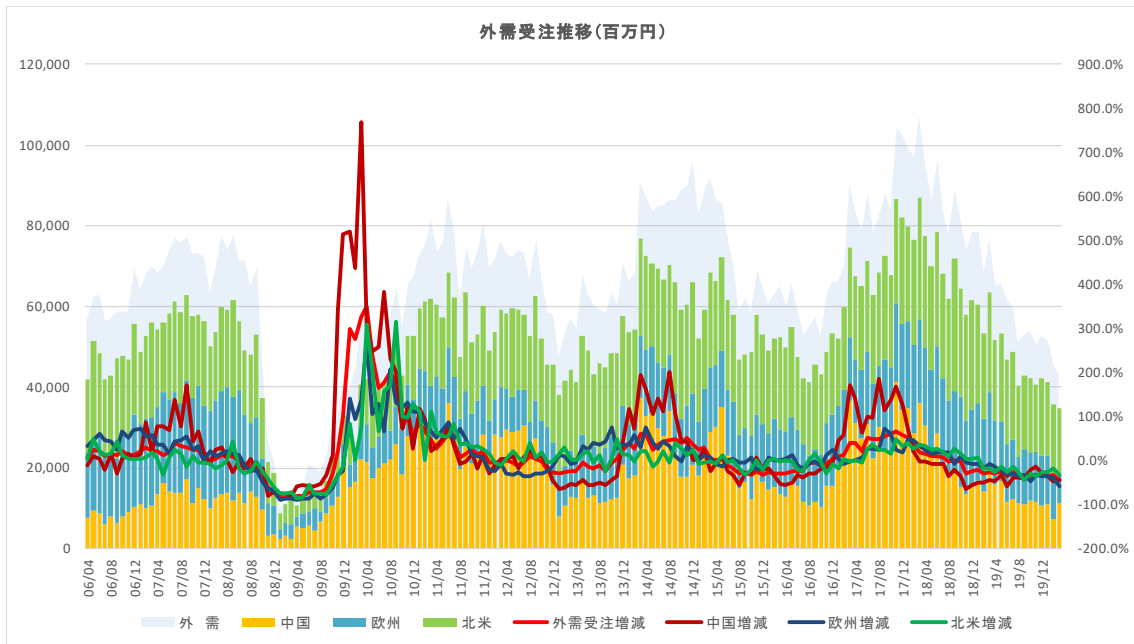
工作機械工業会 3月受注確報 3月40.7%減で4月以降コロナ影響更に強まる

3月受注は同月比40.7%減774億円、年度末も2月並みで3月では10年3月以来の低水準

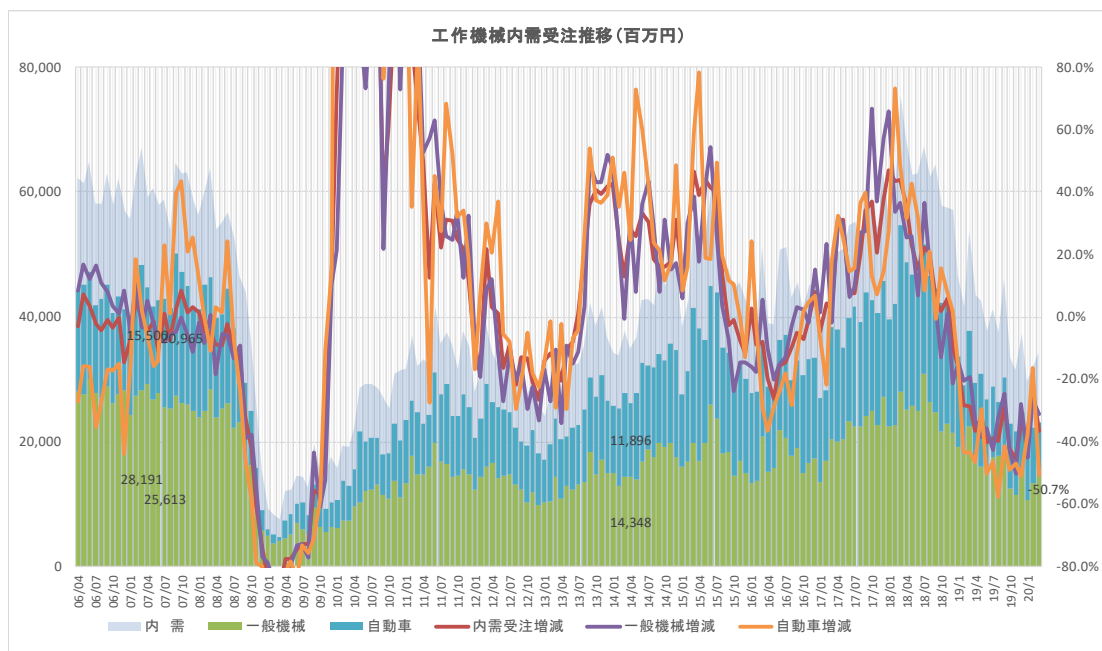
4/21の15時に日本工作機械工業会の3月受注確報が開示された。月受注は前年同月比40.7%減の774億円。2月の772億円に対し年度末月ながら前月比横ばいで、底抜け状況。前年同月比18ヶ月連続減少、3月として2010年3月の758億円に近い数字となった。



外需は432億円(43.7%減)で、18ヶ月連続マイナス、2010年2月の453億円以来の低い水準。3月として前月比4.5%減、3月として前月比マイナスは25年ぶり。地域別では中国が前年同月比43.8%減と25ヶ月連続減少したものの、前月比では53.1%増の113億円と、100億円超に復帰、コロナ影響の沈静化が好影響している可能性がある。一方、欧州向けは17ヶ月連続同月比減の61.4%減と厳しく、2012年8月以来の80億円割れ。特にドイツ66.3%減、イタリアに至っては82.5%減とコロナウイルスが直撃している。北米向けは14ヶ月連続前年同月比減の34.3%減。但しアメリカ向けが45.7%減と、9年2ヶ月ぶりに130億円を割り込み122億円に止まるが、これから更にコロナ影響が加わる気配。外需の業種別動向では主要4業種いずれも前年同月比減少。一般機械が46.5%減、自動車が43.5%減、そしてコロナ影響などから航空・造船輸送用機械向けは68.0%減と2012年11月以来の低い数字となっている。航空・造船輸送用機械向けは世界的な移動制限からユーザー業界が破綻の危機に瀕しており、ダメージが更に増してこよう。

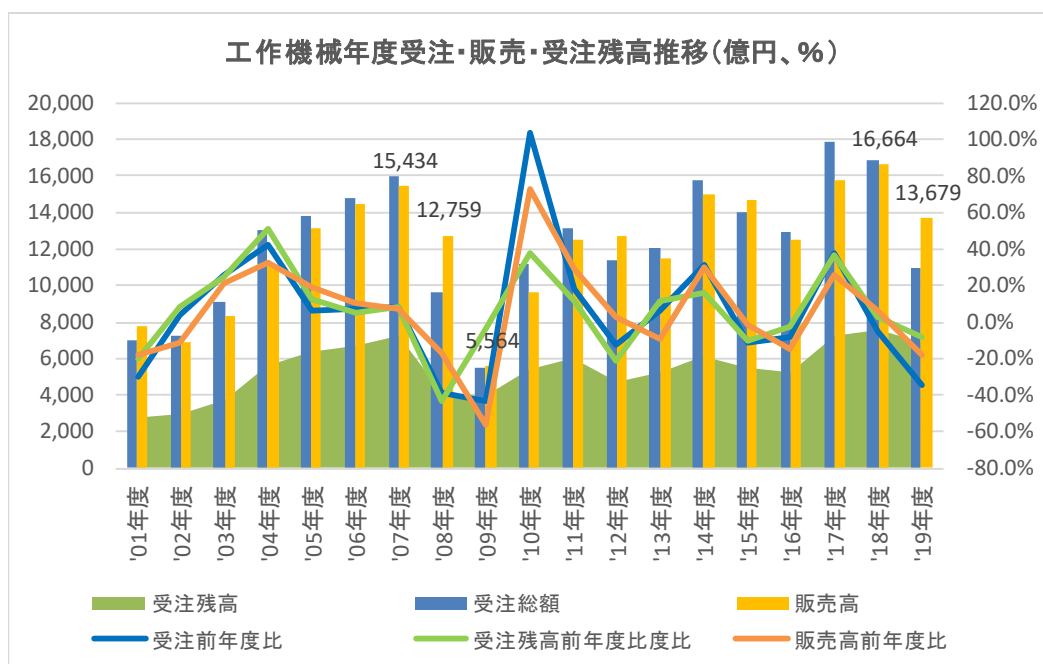


内訳は内需が342億円(36.5%減)で16ヶ月連続減、3月としては2013年3月の336億円以来の数字。主要4業種全てが減少、全11業種で見ても官公需を除き減少。とりわけ厳しいのが自動車向けで、前年同月比50.7%減、2月比でも17.7%減と、3月に前月比減少するのは10年振り。また中でも自動車部品向けは61.4%減に。



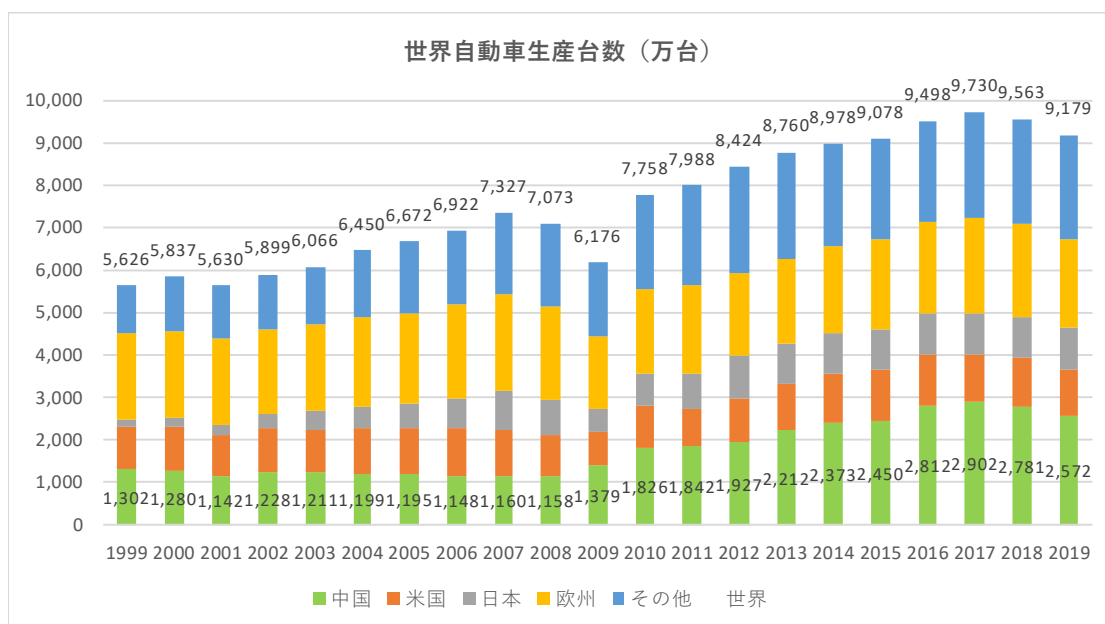
2019年度工作機械受注は34.9%減の1兆995億円と2010年度の1兆1136億円を下回る
2019年度の受注総額は辛うじて1兆円を上回る1兆995億円(34.9%減)となった。取

益が出せる月次 1000 億円を下回る厳しい状況にある。販売額は 1 兆 3679 億円 (17.9%減) となり、月次 1000 億円を上回っており、3 月期決算企業について大幅減益ながら黒字決算は保てる見通し (特損などで税引利益が赤字転落はあり得る)。受注残高は 3 月の販売額が 1267 億円を確保し、受注が低迷したことから 4907 億円 (前年度比 34.7%減) となり損益を保てる 5000 億円を割り込んでしまった。この数字は 2013 年 4 月の 4957 億円以来の 5000 億円われ、3 月期末として 2013 年 3 月の 4760 億円以来の低い数字。



2020 年度受注は 7000 億円 (36%減) と 2 年連続 3 割減懸念で各社は上期赤字転落も

コロナウイルス影響は人的交流を世界的に阻む動きにある。特に工作機械の最大ユーザーである自動車産業は昨年に続き 2 年連続で生産が減少する見通し (但し微減見通し) であったが、コロナウイルスの影響で、リーマンショック並みの 2 桁減少の懸念も出てきた。4~6 月においては中国以外の地域ではほぼ全面的に自動車工場の操業がストップ、中国も生産再開ながら販売が好転せず稼働率が高まらない状況にある。しかも各社の新車発売見送りのアナウンスが相次ぎ、世界的にモーターショーの中止決定がなされている。このような環境下、受注の底打ちが秋以降にずれ懸念が現実味を帯び、2020 年度受注は 7000 億円 (36%減)、2 年連続で 30%減も視野に入る。



3月決算企業にとって、新年度は4月、5月受注は世界中で低迷が見込まれ、売上面でも国内外の主力工場の稼働率が軒並み低下する状況が想定される。加えて現状は大きな受注キャンセルは生じていない模様であるが、昨今の状況からリーマン時のような大型キャンセルも生じかねない。このような状況から、受注残高が5000億円を割り込む中で、工作機械関連企業は少なくとも上期は軒並み赤字転落が見込まれる。また今回のコロナウイルス騒動は世界的な移動を制限することなしに終息が難しいと見られ、今後、ウイルスに対する治療薬、ワクチンの開発が進まない限り、自動車産業だけでなく航空機産業を含め2021年度も新規の設備投資意欲が生じない懸念がある。情報という移動を伴わず成長できる分野では半導体製造装置向け、また人を介在させないという意味で完全自動化という形で産業用ロボットなども需要回復が見込まれるものの、工作機械受注全体をカバーするには至らず、工作機械業界は向こう2年程度の低迷を余儀なくされる厳しい局面にあると言えよう。

当面、米国比率の高いオークマ、航空機に強い牧野フライス、半導体製造装置向けで機体が高いが工作機械、FAでダメージを受ける安川、世界的に工場展開することが裏目となっているOSG、高PERで今後、月次売上が急減しそうな機械商社のミスミなど、比較的最近の値持ちがいい銘柄であり、ここは10年来安値更新もありとしてネガティブに見たい。なおツガミについては小型工作機械であり、コロナ影響を脱しつつある中国向けが多く、工場も中国主体のため、またDMG森精機は欧州工場がストップしている中で新安値を更新しているため、下げ幅は小さいと考える。